



京鹿子

12月号

豊 田 都 峰

灌 響 集 その二十八

松 手 入 れ 威 儀 を 正 せ る 大 手 門
持 ち 色 を 促 し そ め て 過 ぐ 野 分
秋 め く や 発 ち ゆ く 水 の 草 が く れ
穂 す す き の く れ が た い ろ の 二 三 本
曼 珠 沙 華 む ら が り す ぎ て 雲 ふ や す
草 虱 つ け て ひ ぐ れ を み つ け け り



風 追ひし日の証しなる草風
雲 数へまた草風競ひし日
数 珠玉やいつも水輪のよるあたり
数 珠玉や波紋をたたみためたる
野 末まで跳ねる角度を溜む蝗
奥 まりし入江や秋の光ゲ名残り
船 泊りさざなみの溜む秋名残り

「俳句界11月号新作巻頭3句」掲載

神無月
丸山佳子



今さらと思ふ約束神無月
風でない本気で落ちてくる木の实
マスクして自由市民ら生き生きと
鴟の聲天へつゝぬけうれしき日
鴟鳴いて朝の味噌汁沸騰す

秀華採集

空蟬へ心配ないと言ひきかす

木戸 渥子

残されたものへの心くばり。その具体的なものとして「空蟬」を採用した点を評価したい。一番頼りない「残されたもの」だから。だから「言ひきかす」である。

新涼や骨整へて立ちあがる

亀井 福恵

遠筑波絵筆に拾ふ秋思かな

佐々木 紗知

前句の「骨整へて」が楽しい。大きく骨が鳴ったことであろう。後句の「秋思」は水彩画として具体化されたことであろう。ともに読者とともに味わい合えばよい作品になっている。

鈴鹿 仁

菊人形

元禄の本懐ここに菊人形

石投げて水輪の叫び秋逝かす

系露忌二句

悼む日はささやくやうに小鳥来る

合掌はこころの証し露ひかる

渡辺 純氏追悼

菩提子や純とすばるのをんな唄

近 詠

和田 照海

大津島

終戦日油凧ぎして大津島

人影に隠る船虫回天基地

「母上」と書き出す遺書や敗戦日

船虫や敗戦しらず出陣す

特攻の母の唄あり盆の島

神麓集



百日紅 北村 香朗
重々しく打ち重なりぬ百日紅
百日紅捧先たわわ重さうに
純白の朝顔選みつみ摘みそろふ
更けてなほ啼きつづけをり法師蟬
法師蟬この夜限りと鳴きつづく

芒の穂 藤岡 紫水
秋涼し白絹に置く翁面
虫に覚め虫に耳貸す独りの夜
夕暮れを早めて雨の吾亦紅
一叢の芒夕日に穂を揃へ
鶏頭の影まで染めて落つ夕日

故里の風で飛びたき夏帽子
八月は雲の墓標が立ち並ぶ
生命の波打ち際に来て涼し
涼しげにふの字ふんわり坐りぬる
善人でぬる危ふさの冷奴
松田 都青

師走の章 竹貫 示虹
年の瀬に音なき刻の早さかな
ガンダーラ白毫抜けてゐる寒さ
朔風へたしかかな一步大師像
のしかかり来る雪嶺や月あげて
逝く年や句をささやかな墓標とし

曼球沙華 柴田 朱美
ひたすらの一本道や曼球沙華
傾むきし旧家の土蔵曼球沙華
どこに腰おるすも土手の曼球沙華
半身を魔性に預け曼球沙華
風葬も土葬もやさし曼球沙華

去来忌 丹生をだまき
その墓の小ささを詠み去来の忌
嵯峨豆腐昔の味して去来の忌
父母の年齢はるかに越えて栗を食む
秋雨に昼を灯して紅をさす
穏やかな日和コスモスだけに風

神麓集



秋の声 枕沈めてひそやかに
 山の陽に歩行練習勵まされ
 木犀の生垣に沿へば歩数ふゆ
 秋色の外出着吊り眺むるのみ
 蟲しぐれゴーシユのセロも混じるかに

秋の声

丸井 巴水

絵手紙の金は残暑の他にゐて
 木犀の金の香りや女房古る
 干菓子型秋を詰め込むたなごころ
 龍と成るつもり蛇が衣を脱ぐ
 隧道の抜け際あをき秋のこゑ

小堀

入道雲正体得て崩れつ
 分針は動かぬ時計夏座敷
 理科室のくちびる赤し晩夏光
 丈夫で長もち過ぎたるは烏瓜
 落鮎や光と闇と志





京鹿子集

豊田都峰選

炎昼の言語中枢文字吐かず

熊蟬にしつこく鳴かれ再起動

空蟬へ心配ないと言ひきかす

異なるものに電気予報とごみなます

身の丈の蟬の鳴く木を墓標とす

新涼や骨整へて立ちあがる

高樓も岬も無月にかはりなく

薄ごろも背筋に刀自のたたづまひ

遠筑波絵筆に拾ふ秋思かな

霧の川徐々にじよよにと戦ぐかな

京都 木戸 渥子

福山 亀井 福恵

千葉 佐々木紗知

突堤の忘れものめく蜻蛉の死

隠沼の精霊に乗る秋の蝶

大夕焼け荒野二分すハイウエイ

折り鶴を両手で受けし菊の宴

言ひ訳を子に打ち消さる秋彼岸

秋夜長ブラジル医師の和文メール

坪庭の向かうの灯り夏住居

街路灯いつ動くやら守宮かな

愛犬の立ち寄る先に赤まんま

初秋や親類集ひ皆息災

アリソナ 伊吹 之博

澁川 東 秋茄子

術終へし友の電話や梅雨の明け
鉾稚児や十万石の立ち姿

さま
神田 惣介

十二時の空は真青に終戦忌
夏逝けり絶えぬ余震に水備へ

新涼の空へとシート貼りにつけり

高野 春子

ビル谷間ゴンドラ往来秋の風

菜園は大向日葵の宰領す

千葉 河内 桜人

踊り手へ櫓太鼓は息合はず

秋天下体重計に載つてみる

金秋や忽ち来たる計報かな

浦安 安田 一郎

亡き祖父の青磁の香炉白樺

身に入みて君の遺句集重たかり

盃蘭盆の夕空水をふふみをり

伊藤 希眸

高原の一両列車霧まみれ

薊の絮人の匂ひにまとひつく

松戸 伊奈 勝代

深層水らつば飲みする蕎麦の花

香盆の艶や涼しさ床にのる

直江 裕子

追悼や線香花火の玉むすび

靴に雨このおもくれを残暑といふ

直江 裕子

いつしかに小言幸兵衛白地着て

ぎりぎりの攻防レモン滴らす

直江 裕子

油照り物憂げに佇つ風見鶏

泣きにゆく母なく桃の水ははじく

岡田 愛子

茄子の馬一番星は誰ぞかし

露けしや不定愁訴と医師のいふ

岡田 愛子

蓮池や上野の喧騒遠ざける

衣被真砂女のやうには生きられず

岡田 愛子

紅蓮の紅をはらりと風渡る

秋の雲動かぬがまま被ふ空

岡田 愛子

東京の臍無機質に夏の月

待つほどに話とぎれし立待月

岡田 愛子

かなかなの耳に入りくる安堵感

馬追の背丈越しゆく脚長し

岡田 愛子

息通ふ七年前の蟬の穴

どこことなく力積み次ぐ男郎花

布川 孝子

ゐのこづち手折りて風を感じをり

ご隠居の尻を叩いて草伸びる

布川 孝子

頬杖に寝そべる案山子もいたりけり

打ち水に腹打ちさうな陶狸

布川 孝子

カンナ燃ゆ大地の力の限りまで